



# やぐらえ

第29号

スカウト活動を通して

神社への理解と

信仰心を育む

白鬘神社権禰宜 今井 達

本年七月二日より六日まで宮城県蔵王に於いて第八回日本ジャンボリーが開催されました。ジャンボリーは四年に一度開催されるボーイスカウトの祭典であり、今回は日本全国はもとより周辺各国より多数のスカウトが参加し約三万人の大会となりました。このように日本全国又全世界に及ぶスカウト活動の中で、他の少年団活動と比較して最も特筆すべき点は宗教（信仰）を一つの柱としていることとあります。スカウト個人には明確なる信仰を持つことが奨励され、又信仰を持つスカウトに対してはその証として宗教章が授与されます。神社界に於いても「神道の知識」「神棚のまつり方」「拝礼作法」等を修得し、禊の実習、神社奉仕を完了したスカウトに対し「神道章」を授与しその信仰を高く評価しております。神道章制定以来現在までに約五百名のスカウトが受章、神社スカウトとして活動に励んでおります。当社のボーイ

スカウト墨田第九団は発足以来十二年を経て現在まで毎年のように受章者を出し、今後も「神社スカウト」として充実したいと考えております。又ガールスカウト東京都第一五九団もあり少女たちの教化育成を行っており、ガールスカウトは主に浦安の舞奉仕を通じて神社への理解を深めるようにしております。しかし、これらボーイスカウト・ガールスカウトに対しては、かに神社や信仰の話をするかは、やはりスカウト活動の中心である野外活動を通して行うことが最良のことと考えます。自然の恵みを肌で感じ、その生活の中から信仰心を育んで行くことが理想であります。私としてもスカウト達と共に屋外に出て話し合い、彼等と生活を共にして神社のことを話し合うように心掛けております。又、ハイキング、キャンプ等に出かける時は最寄りの神社に参拝しその神社の由緒を調べ、宮司さんの講話を聴くように心掛けております。都内には神社スカウトもまだ少く、一団でも多く増やしていく為にも各神職さん方がスカウト活動に理解を持って接して戴くことが一層の推進力になると信じます。

### 神楽殿の図書館

一年間大祭時以外はほとんど使  
用しない神楽殿に児童文庫を設け  
子供に開放している神社がありま  
す。杉並支部馬橋稻荷神社（本橋  
久徳宮司）では教化事業の一端と  
して日曜児童文庫を三十二年前の  
昭和二十五年五月に開設し今日に  
至っています。

戦後の混乱した社会情勢下に於  
ける青少年の健全なる育成を願っ  
て始められたこの事業も当初は多  
くの御苦労があったそうで、夕食  
後古本を集めにリュックを背負っ  
て出掛ける日が続いたり、古い八  
足を机がわりに使えるように改造  
するなど大変だったそうです。

開設当時の五月五日より八月末  
の毎日曜日から現在は夏休み期間  
中毎日午後一時より四時迄の読書  
会として好きな本を読んでもらっ  
ているとのこと。神社と、地  
域社会の青少年協と、地元自治会と  
が三者一体となってこの事業を推  
進しているそうです。宮司さんは  
「神社の神楽殿で楽しく本を読む  
子供達の姿を、神様も御本殿の奥  
から温かく見守って下さること  
思う」とのことでした。

### 幼児教育におもう

天祖神社宮司 大野二良

新聞紙上で幼児人口が減少し各  
幼稚園経営者は生き残り競争にし  
烈を極めていることがレポートさ  
れていた。出生率の低下で私立幼  
稚園は経営難にあえぎ、定員割れ  
が激しく半数を確保するのやっ  
つといわれる幼稚園も多い。

周りをみわたしてみれば公立幼  
稚園がいくつもでき、保育園がそ  
の間隔をうめている。そこへ他の  
大きな幼稚園のスクールバスがど  
んどん園児を集めにくる。

かつては「スクールバス」「長  
時間保育」「給食」が園児集めの  
三種神器といわれてきた。しかし  
てそれも母親の負担を軽くするの  
が主なねらいで教育とは無関係と  
いわれ批判を浴びた。しのぎを削  
る幼稚園の最近の姿はまさに頭数  
をそろえればというスカウト時代  
に入ったという記事だった。

世間の眼をここにひきつけるに  
充分な新聞社のことばは、幼児教  
育の現場にはふさわしくない一部  
の不健全幼稚園のために私立幼稚  
園全体をダークティな色に染めてし

まった。しかし我々はそうした中  
においても「日本の幼児教育は何  
如にあるべきか」の論議を今まで  
以上に真剣に考えていかなければ  
ならない。



「保育」とは何か「教育」とは  
何か、ということをあくまで子  
供の権利、人権を尊重するという  
視点にたつて明確にしていく必要  
がある。そこではまずそれらの概  
念を「人間形成の基礎となる幼児  
期の全面的発達を系統的にうなが  
すもの」と意義づけるところから  
始まる。それは、すべての子供の  
健康で文化的生活を基礎に、発達  
のあらゆる可能性が模索できるよ

う系統的に援助、補助してゆく行  
為であり、そのためには何よりも  
生活現実に即した環境が整備され  
なければならぬ。大人はもとよ  
り、子供たちにとって生活体験は  
発達への基礎となるばかりでなく  
そこでの日常経験を通じて自らの  
発達をうながすものである。



つまり、子供の生活体験の中ま  
た遊びの中で、豊かな個性を創造  
し、その中から相互学習が充実し  
てゆくような方向への援助こそ、  
のぞましい「保育」「教育」の姿で  
あり、現場としての幼稚園のめざ  
してほしい姿ではないだろうか。

日頃身に付けた趣味や技術等を  
お社の教化活動と結び付けて存分  
にその力を発揮している宮司さん  
が多くさんいらっしゃいます。

今回は、そういった活動をなさ  
っている方々の中の何人かに御登  
場していただきます。

中国への興味から景德鎮の「焼  
きもの」に関心を持ち、自宅に窯  
を設け趣味として始めた陶芸を中  
心に幅広い活動をしておられるの  
が、葛飾堀切、天祖神社宮司宮川憲  
一さん「その楽しみから自分自身  
の神主としての人間性を創り上げ  
ている」と述べ、神田神社や柴又  
クニ美術学院等で講師をしておら  
れる、片わら各グループの自主的  
な同人展、業界の専門誌や美術関  
係の方々とのお付き合いから、年  
に一、二度同人展や個展を開催す  
るというアツと驚く程の活躍ぶり  
です。更に、「大事なことは、こう  
いった表向きの部分より、氏子青  
年会や近所の人との話し合いがス  
ムーズになった。ことは趣味とし  
てやる事が大切、神主だけでは生  
活が成り立たないから何かをやる様  
ではマイナス」と指摘、あくまで  
もお宮が中心と断言された、この  
心意気には感心させられました。

品川、三谷八幡神社宮司の高井  
鉄夫さん、昭和三十八年頃から  
「茶道」の師範として、お弟子さん  
を集めていらっしゃるが「氏子の  
理解がもう一步、本来、茶道は日本  
人の古い生活とも密接で、心を磨  
くといった思想的精神からも、お  
宮とは結び付きが強いにも拘わら  
ず、年老いた方の中に茶道を道楽  
と見る人がいて当惑しています。  
そんな中で救いは若い人の中にお

### 趣味を転じて教化活動

電話インタビュー

赤城神社と禰宜

風山 栄 雄

茶に人気の出て来ているところで  
しょうか」ということですが、名水  
を万座までとりにいたり、境内  
になんとか茶室を建てたいと、悩  
みの中にも情熱がうかがえます。  
さて、先代宮司さんの後を継い  
で、華道十二代目の家元台東、銀  
杏岡八幡神社宮司の渡辺和寿さ  
ん、氏子の情操教育がねらいだそ  
うですが「私自身、若輩なもので  
師として華道と神社信仰を結び付  
けるのは、なかなか難題ですし、  
神社という面で商売の様に宣伝す  
るわけにもゆかず、又氏子の方で  
もやはり、いま流でいうネームバ

リューのある所へ行くため思うよ  
うに人が集まらなくてネ」確かに  
このところ若い女性などの趣味が  
多様化してスポーツや音楽と同じ  
ように、華もファッションの一つ  
として考えられている現在、道を  
極めるといった「華道」の要素と  
お宮とを結び付けることが大変む  
づかしくなっているのかもしれない  
せん。

最後は、新宿西向天神社宮司細

野倫一さん、昭和三十年から始め  
た「書道」の教室を社務所に隣接  
する寺小屋イメーシの残る勸学館  
で開いていらっしゃいます。「一  
時は、三百人もの子供を教えて居  
りましたが、現在は百人前後、兎に  
角、氏子の方々からの評判は大変  
良く、子供に落ち着きが出てきて  
た等と喜ばれる事もしばしば、御  
祭神が菅原道真公ということもあ  
って私には青少年教化育成という  
面の一端を担えて満足していま  
す」との事でした。  
もともと学校の教師をなさって  
いたとあって、教育に対する熱心



製作中の宮川宮司

さがうかがえますが「稽古日、決  
まっている為、お宮の忙しい時等  
スケジュールの調整が大変で、こ  
の辺の問題も含め、もう少し組織  
的に纏めて、真の意味での教化を  
めざせば最高なんです」と多  
少せいたくな悩みもお持ちの様子

こうして皆さんのお話しをうか  
がってまいりますと、立体性を持  
って活動されている事には頭がさ  
がります。冒頭の宮川さんの「信  
仰と結びつけて、陶祖祭り」とい  
った信仰の話を活動の中に機会を  
もって話し、絵画を始め記念品と  
いったもので氏子の方々に還元で  
きる形をとり、その結果として、  
いかにも神主らしい趣味になって  
いけばネ」というお言葉が大変印  
象的でした。

〳神社は社のイメージ〳



パーソナリティ 浜畑 賢吉

(劇団四季所属)

構成 成 風山 栄雄

(赤城神社福宜)

浜畑さんと私とは、ある番組を通じて月に二〜三回のお付き合いをしています。私が神職であることは御承知で、お宮の話など色々話を聞かせて下さいますが、今回は彼の生活の中での神社観などホットで爽やかな話題を提供していただきました。

私は「四季」という劇団に所属していますので、今はこの秋に上演される二本のミュージカルの準備中です。秋に上演する為には、五月よりリハーサルがぎっしりで更にテレビに二本のレギュラーを

持ち又、FM東京の「ザ・ミュージック」のおしゃべりを担当している訳ですから、毎日寝る時間も惜しんで頑張っています。その上、本を出版することまで引受けられない寸時をのがさず執筆しなければならなくなってしまい、タクシー等で移動する時だけが熟睡出来る唯一の時間という生活になってしまいました。

その点、地方へ公演に出掛けたらするとレギュラーの放送については録りだめしておくので若干気持にゆとりが出来ます。そんな時は必ずといってよい程最寄りの神社へお参りすることにきめていくんです。というのは、地方公演ではスケジュール的にちょっとした暇が出来る訳ですが、そういう時は見知らぬ土地ということと逆に変な緊張感につつまれて、すぐ後の本番を考えると気分的に、プレッシャーを感じてしまうのです。そんな時神社へお参りすると不思議と心が休まるんですね。

私の場合、けっして信仰というような立派な考えを持っているわけではないのですが、社の境内にたたくんで、たくさんのケヤキやクスノ木の木立ちを見上げながら

風の音でも聴いていますと、何千年という日本の歴史というか、日本人の心の原点といったものを感じて、気持ちが落ち着くんです。つい先日大宰府天満宮へ行った折にも宮司さんとお話をしてきました。私は歴史の「重み」を肌で感じることが大好きでして、趣味は何かと尋ねられる時は、考古学ですとお答えしています。メキシコやボリビアへ出かけて行つては遺跡を見学したり、アフリカやヨーロッパへ行つては博物館を見て歩い



たり、出来得る限り時間の都合を付けては世界中の文明に出逢ってみたいと考えています。私は小さい時から数学が苦手でした。だからかもしれないが人間のものにしか興味を示さなかったんです。そうそうタヒチやパリの遺跡なんかも、とても興味深いものがたくさんあります。

もう一つ、最近はじめたものに「焼きもの」があります。自分の手で土をこねて、型を整え、それを窯で焼き上げたときの喜びは是非共皆さんにも味わっていただきたいと思います。型の無いものを一つのものに創造する喜び感動は舞台にも通じるし、大きく言えば人生そのものに通じているところがあると考え、この頃は窯元まで出かけて行くといった熱の入れようなのです。無心になって土と取り組むとき、私はちょうど神社のケヤキやクスノ木のような心境で自然(杜)の中で堂々と渡りあっている姿を感じながら作品に挑みます。そして、そんなしつかりした、しかも自分に対するおどりのない生き方を、これからも心掛けていきたいと考えます。

中央研修会と教化活動

鈴木照樹

四月下旬、昭和五十六年度の神道青年全国協議会（神青協）中央研修会が、北海道神道青年会の尽力により札幌共済会館を会場に開催され、全国より二百名以上の同胞が集い、研修が繰り広げられた。

昭和五十四年、五十五年と中央研修会のテーマは「稲とのかかわり」であり、その後新嘗祭にお供えする稲を自身の手で栽培する例が数多く見られた事は意義のある事であった。本年度の「防衛」というテーマは、北方領土を間近にひかえる北海道という地域性としてまさに全国の青年神職にその歴史的背景と現状又脅威をうったえるべくかけがえのないものであり、又中央研修会がブロック主催として開催される様になって以来最後の大会であり、本年度よりその開催地が伊勢の地にもどるといふ二点を考えれば、神青協に於いても一つの節をなす大会であったといえよう。神青協通信の第二十一号（昭和五十六年度活動方針、事業計画案）に、自己研修の実践と題

し、以下の様な文章が書かれていた。「……更に自己の再研修に励み、斯界の先兵としての自覚を培い自己の品性を高め、日頃の教化活動にあたらなければならぬ。」

まさしく中央研修会の目的である。今回の中央研修会で実りの大ききを得たのは北海道神青である。一体となって大会を開催に導びいた「和」が、今後の活動に大きな力となる。だが、中央研修会としては、全国的に考えて幾つかの問題点を残した様に思える。

第一点に日程の問題があげられよう「一日目、昼に開会して講演一題、その後、懇親会、二日目、午前中に講演二題、昼に終了」私にとっては初めての参加であった。為、いささかも足りなさを感ずるを得なかつた。もちろん全国から集まるのであるから時間的な制約も理解出来ない訳ではないが、もう少し同じ一日ならば研修に時間をついやしてもらいたかつたと思う。第二点として参加方法があげられよう。東京は十数名の参加者を見たが、各県においては、一名又は二名という所も見うけられた。確かに大変である。東京からの交通費を考えて見ても、全

国の会員が、正味一日の為に参加するといふ事は大変な事である。宮司と称宜、あるいは宮司一人て日々の御奉仕を行なう身にとって参加を考える事は至難のわざである。自然とそれが可能な会員のみ参加となろう。この点が神青協とJC（日本青年会議所）の根本的な差である事を、いま一度検討すべきであろう。会社、商店等、そ

の中で若旦那が一人会議に出席する事とは根本的に異なるのである。JCを引合いに出したのは、当日の研修会中に、役員挨拶の中でよく耳にした言葉だからである。ライオンズクラブ、ロータリークラブ、JC、神青協の会員中にも多数これらの会員となつていく様に聞く、それ自体を問題にしているわけではない。広く多方面の人々と交わり、自己を啓発する事は、今後増々必要になると思われる。しかし、神青協の中に、それらの良い点を、組織の面でも、財政の面でもいかしてゆく上で、もう一度、全国の青年神職のおかれた立場、又その意義を考えて見る必要がある。多くの青年神職にとって参加意欲をかりたてる中央研修会にする事が、神青協の組

織強化にとって最も必要な事であろう。その意味において、本年度の伊勢の地での中央研修会が、自己の再研修から教化活動に実を結ぶ様な本来の姿を見直す第一歩になる様、見守って行く必要がある。神青協は、大きなテーマを長く打ち抜く事も必要であろう。しかし全国の宮司と二人又一人で奉仕にはげむ青年神職の地道な奉仕の姿が又教化活動が、真に斯界の先兵として神青協を、そして神社界をも動かしている大きな原動力である事を再認識する必要があると思われる。



和五十七年度

定時総会

五月十一日、東京都神道青年会昭和五十七年度定時総会が神社庁に於て神社庁長松山先生を始め諸先輩各位の御来席を戴き会員多数出席のもとに開催された。

総会に先立ち神社庁長松山先生による「青年神職に望む」と題した講演があり、先生の経験談をも含めたお話は大変有意義なものでした。

続いて総会に入り恒例の式次第に従って五十六年度会務報告、決算報告並びに監査報告・五十七年度事業計画案・予算案と議事進行各項審議承認された。

次に質疑に入り中田先輩より現行の年額参千円の会費では会運営が充分に出来ないのでは、やり繰り、切り詰めにも限度があり会費の値上げを考える時期に來ているのでは等諸先輩からも御指摘等有り、会費の値上の幅等は別としてここで次年度より会費を値上げするという事を決めるべく決を取り賛成多数により承認された。

懇親会の席も諸先生方を混え和気合々の内に総会を終了した。

昭和五十七年度

事業計画

教養部

- 一、教養講座
- 一、みそぎ鍊成講習会
- 一、雅楽講習会

教化部

- 一、青少年の教化育成
- 一、都氏青協の促進とその事業の参加協力
- 一、国旗掲揚推進運動
- 一、神棚奉斎運動

渉外部

- 一、神青協事業への参加協力
  - イ、神青協関東地区総会
  - ロ、神青協総会
  - ハ、沖繩学徒慰靈祭
  - ニ、神青協中央研修会
  - 一、その他友好団体への協力
  - イ、英靈に答える会
  - ロ、日本を守る東京都民会議
  - ハ、北方領土問題

広報部

- 一、やくわえ二回発行

事業部

- 一、研修旅行
- 一、ソフトボール大会
- 一、家族懇親バーベキューバス
- 一、忘年旅行会
- 一、新年会
- 一、ボーリング大会
- 一、慰勞旅行会

神主の稲作り

やっつて

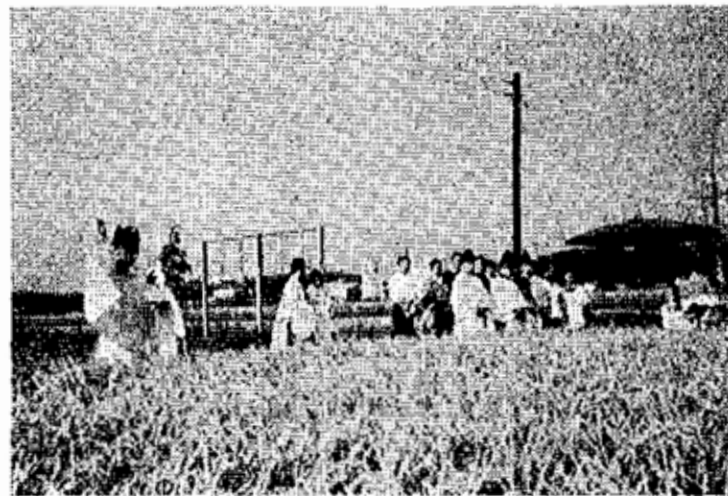
みませんか

世田谷支部では、隣りの目黒支部と共に昨年より神職自らの米作りを始めました。最近都会では「農」に対する関心も薄れ、祈年・新嘗などの祭りの意味もわからなくなっている氏子が増えてきたことから、日本人が神代より受け続けた稲作の心に都会の神職が体験して食物に感謝する心、また日頃のお祭りをご奉仕申し上げる意義を再認識するとともに、神職自らの手で稲を育て、氏子教化に役立てていくことを目的としました。

昭和五十六年六月十三日小雨の降るなかで田植祭が世田谷支部長野沢紀充宮司を齊主として執り行なわれました。この神饌田は世田谷支部神職の趣旨に賛同して下さった神奈川県座間市の鈴鹿明神社の総代さん、島村昌一氏の田をお借りしたものです。広さは一反。祭典後白丁姿で田に入り、田植えを行ないました。



約半年後の同年十一月三十日、立派に稔った稲穂の抜穂祭が、同じく野沢宮司が齊主となって執り行ないました。



この日は晴天に恵まれ、小学生幼稚園児も参加。神職たちが刈り取った初穂を土地の神にささげて収穫を感謝しました。

稲穂は稲の上から出てくるのではなく、稲の茎の中間が割れ、そこから白い小さな花が咲き稲穂ができるのを見た時「お米が、生れる」という神秘にふれたそうです。六月に植えた小さな苗が半年足らずで重たく穂を稔らせているのを見ると、まさにその神秘にふれ

た想いがしました。



収穫は約七俵、刈り取った穂を干して稲束にし、支部内神社に配って新嘗祭におそなえするとともに、正月には参拝の方々にこれも支部神職自ら作った「まつり」とうがり版刷りのチラシと一緒に一本づつ差しあげて氏子教化に役立てています。

この稲作り今年も六月十二日に田植祭を執行了しました。参加御希望の方等おいでならば、世田谷支部長野沢紀充宮司まで御連絡下さい。

### 神楽殿の勉強会

世田谷支部深沢神社（新倉重行宮司）では神楽殿を利用して近くの子供達を集めて勉強会を行なっています。

昭和五十一年から始まり、初めは算数のみ、その後国語が加わり、五十七年六月から新たに英語も教えることになった。深沢、東深沢、桜新町、等々力と近くの各小学生がおよそ百人ほど通ってくるそうです。これらの教科は公文式の先生が教えているとのこと。

昔の寺小屋のようにして、子供達の神社への親しみを計るのがねらいだそうです。

ほかにも勉強会の行なわれない日をぬって、老人を対象とした民謡教室等も行なっています。

またここには海洋少年団の本部があつて、百人前後の少年少女達が団員として毎週日曜日境内にて訓練を受けています。十月の例大祭の時に鼓笛隊の先導・演奏のほか、神社の諸行事にいろいろと御奉仕することです。

長谷川

### 「活動状況」

#### ○ 国旗掲揚推進運動

三月二十一日、小雨の中、中野氷川神社に集合、城東方面を中心に自動車日の丸パレードを行ない荒川、素盞雄神社にて解散。

当日雨天のこともあり、ほとんどの家に国旗の掲げられていなかった事もあるが運動方針について今後課題を残した。

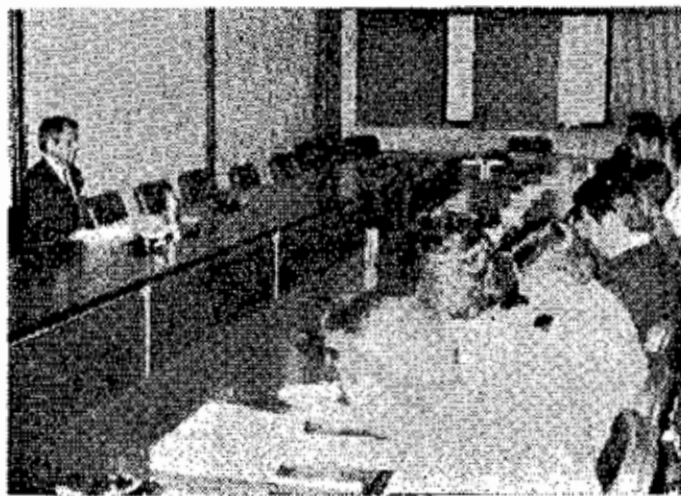


○三月三十日 役員会 於神社庁  
○四月十六日 役員会 於神社庁

#### ○ 研修旅行会

六月九日・十日 ホテル水葉亭に於いて研修旅行会が開催された。懇親宴会に先立ち同館会議室に於いて明治神宮武道場至誠館専任師範田中茂穂師による「神道と武道」と題する講演を拝聴した。

続いての懇親宴会は山田外郭団体部長の乾盃で始まり、最後は皆肩を組んで「うるわしき山河」を大合唱、宴会中には福引やらジャンケン大会等があり、優勝は細野倫一先輩、準優勝には斉藤成徳先輩が入賞した、尚、当日講師の田中先生も一緒に盃を交わされ、和やか且つ宴たけなわのうちにお開きとなった。



### 編集後記

神社は地域社会との拘り、それは信仰のみではなく日本人として生まれたものにとってその土地の神社は心の故郷なのです。境内に入ると他の処にいるのとは異って心にかか余裕が感ぜられます。それは幼ない時から年月を隔て久しぶりに訪れても、何かそこに立つ人をやさしくつつんでくれるお社のお姿、そんな中に安心感があるのでは。今日のぎすぎすした社会の中で、青少年教化育成の一つとして境内を利用し立派な活動をなさっている諸先輩の一例を掲載させていただきます。そして我々青年神職は、この様な活動をなさっている先輩諸兄を手本として何か地元にあった活動をすべく努力しなくてはならない様な気がします。我々も何か機会をつかんで実践していきたいものです。

昭和五十七年九月八日  
東京都神道青年会  
東京都港区元赤坂二―二―三  
東京都神社庁内  
電話 四〇四―六五二五(代)